

平成28年度教育改革FD/ICT理事長・学長等会議の開催結果の概要

1. 開催日：平成28年8月1日 青山学院大学渋谷キャンパス
2. 参加者：130名（59大学、9短期大学）、27年度は151名
3. テーマ：「学士課程教育の質的転換に向けた課題とICT活用を含む改革方策」
4. 会議の目的
三つのポリシー策定による教育改革の実質化に向けた取り組みについて理解を深め、学修成果の可視化など教育の質保証を進めるための教学マネジメントの取り組みとしてICT活用を含む対応策の方向性を探求した。
5. 確認できた点
 - ① 三つのポリシーは、検証・測定の仕組みがなければ機能しないので、検証可能なアセスメントポリシー（評価方法）をどのように取り入れるかが重要となる。例えば、4年間で身に付ける全学的な到達目標を前提に検証・測定に必要な観点、尺度を設定し、3段階で評価・改善を行う。一つは教育プログラムの達成状況評価として、学生のベンチマークチェック、2年次終了段階での到達度認定試験、ルーブリックを用いた卒業研究の集団評価を行う。二つは科目担当者による教育方法の自己評価を行う。三つは学生個人によるルーブリック評価、eポートフォリオ、面談などを踏まえて、学修到達目標の達成を自覚させる。
 - ② 学位プログラム中心の授業科目編成への転換を図るためには、学生に向けた学修成果の可視化だけでなく、教員個人及び教員組織で授業科目の相互改善が行えるよう、学修成果の可視化データを教員に自動提供するとともに、授業内容と成績評価など授業科目の可視化と授業設計・成績評価のガイドラインの導入とシラバス改善の工夫などが課題となる。
 - ③ eシラバスによる教学マネジメントでは、シラバス内容を相互点検することで教育内容を確認し、学生に整合性のとれた教育環境を提供することが可能となる。また、eラーニング、ビデオ・学修教材、レポート提出、ポートフォリオなどの機能をeシラバスに学修ポータル化することで学修状況の把握が可能になる。IRによる修学指導では、修学状況悪化学生の前兆をIRシステムで予知し、修学上の問題を発見して具体的対応策を検討し、効果を確認して対応策の改善に活用している。
 - ④ アクティブ・ラーニングの達成度評価の方法として、学部指定のアセスメント科目を設け、学生は自己評価ルーブリックで汎用能力の伸長を点検し、その結果を学修ポートフォリオとして共有し、グループで理解・励まし合う中で成長を目指す。また、教員は、授業ポートフォリオを共有し、学生の成長のために何ができるかを他学部教員も交えた同僚会議で学び合い、相互評価文化の醸成を図っている。
 - ⑤ 教育の質的転換の手段として、ICTの活用は重要である。例えば、学修成果の可視化、多面的なデータから学修達成状況を科学的に分析するため、教職員、施設設備、教育資金、情報環境など資源の最適化を点検し、経営面から改善策を見いだすIRシステムの整備と組織体制の構築が必要である。
6. 実施結果（19名によるアンケート結果を踏まえて）
 - ① アンケートの多くが三ポリシーの見直しについて、アセスメントポリシーを考えることが重要であるなど、大変参考になったとの感想が寄せられた。
 - ② 教育や経営でのICT活用について、議論をすすめていく必要が感じられた。